みんなが納得する授業を創りあげていこう

～鈴木克明（熊本大学大学院）～

〔概要〕情報教育の実践は、情報社会の学校づくりをリードしていく役割を担っている。すべての教科・学年を担当する先生たちに影響力があるような授業を創ろう。子どもが学ぶ喜びを感じて学校が好きになるような、それをみて保護者が「なるほど」と思うような、そして授業をやっている教師本人が納得できるような授業づくりを目指そう。そのために、みんなで情報を共有し、高めあっていく仕組みをつくろう。

キーワード：　情報教育　授業創造　納得感　情報共有　実践共同体

１．ＩＣＴで学校を変えられるか

「２５年後の学校は，楽しく充実した学びの場になっていると思う。」これは、「教育新聞」2002 年正月特集号に筆者が大胆予測した書き出しの文である。あれからもう 5 年。あと 20 年後に現実のものになってくれるのだろうか。

「IT は，学校を変えていこうと挑戦する教師たちにも，同じように味方する。上からの改革を仕方なく受け止めるのではなく，子どもたちのために何をなすべきか，何ができるかを真剣に考える教師にパワーを与える。(中略)熱い魂と確かな腕をもった教師たちの手によって，学校は楽しく充実した学びの場になる。」これが結語だった。そうでない学校は、25 年後には淘汰されて消滅しているだろうから、25 年後に存在する学校は，楽しく充実した学びの場になっていると思う、とメモが残っている。

もちろん、ＩＣＴが学校を変えるのではなく、ＩＣＴを活用する教師が授業を変え、それが学校を変えるのである。情報教育を担当する教員の責任は重大であり、同時に可能性も大きい。ごく一部の「変わり者」が情報教育をやっている時代はもう過去のものだ。学校全体に影響を与えるような授業を実践する使命を担っているのが情報教育の担当者だ。

２．現在の学校は「楽しく」「充実して」ないのか？

学校は何かと批判される対象になる。親は自分の教育責任を棚に上げて学校にすべてを託す。マス・メディアも一度何かが起きると学校の管理責任を問う論調で染まる。おそらくこれは昔も今も、そして 25 年後も変わらないだろう。

わが国の初等中等教育は、いろいろ言われる割には、世界中から注目を集めている。日本人妻と結婚し、日本に住んでいるアメリカ人の友人が「中学が終わるまでは自分の子どもは日本の学校に行かせる」と言うのだから間違いない。大いに自信を持ってよい。

日本の学校の何がすごいか、と言えば、日本には授業実践から創り出されてきた数多くの実践知がある。授業の日常をじっくり見据え、他の教師に参考になる形で自分の授業についての考えを発信していく。大学の研究者から言われたとおりに授業をしない。これが素晴らしい。今後も、継承して欲しい力強い伝統である。その力が萎えてきたとすれば、どうすれば復活できるかをぜひ考えて欲しい。

３．教育工学的発想で実践アイディアの共有を

「これはよくできた」と思える授業はそう簡単には創れまい。他人はともかくとしても、自分自身が納得できる授業を実現するのは至難の業である。でも、たまにはできる。それはみんなに教えるべきだ。オリジナリティは気にしない。これはよい、と思ったら自分も真似してやってみる。100 人の知恵を借りて自分の授業を 10 倍よくする。せっかくあみ出した自分のノウハウは 1000 人で共有して元を取る。それが教育工学的発想である。全国大会＋Ｗｅｂ発信の実践共同体で支えあって、ともに前へ進もう。